氏　　名	SUN　YI
学 位 の 種 類	博士（　言語学　）
学 位 記 番 号	博　甲　第　10608　号
学位授与年月日	令和５年３月24日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	感情を表すオノマトペに関する日中対照研究 ―「笑い」「泣き」に関するオノマトペを中心に―
主　　査	筑波大学　教　授　　博士（言語学）　　矢澤　真人
副　　査	筑波大学　准教授　　博士（言語学）　　田川　拓海
副　　査	筑波大学　准教授　　博士（言語学）　　橋本　修
副　　査	文教大学　教　授　　博士（言語学）　　蒋　垂東

論　文　の　要　旨

本論文は、日本語と中国語の感情表現に関わるオノマトペの対照研究を目的としたものである。笑いと泣きに関わるオノマトペの実際の使用状況や辞書等の記述などの分析を行い、日中両言語のオノマトペ・システムの違いを明らかにしながら、両言語のオノマトペの使用状況の差が何に由来するのかを論じている。

本論は、序章、終章を含む８章からなる。

まず、序章では、研究の背景が示されたのち、本論文の目的、研究の意義、論文の構成と研究の構成について述べられる。

続く「第１章　先行研究の概観と本研究の位置づけ」では、先行研究の批判的紹介とともに、日本語研究・中国語研究において、オノマトペの範囲や定義が異なること、語と語レベルでの対照や対訳には限界があり、従来のオノマトペの日中語対照研究は不十分であること、対訳辞書類にも不適切な記述が散見することなどが指摘される。

「第２章　研究対象と研究方法」では、研究対象と研究方法について述べられる。対象を感情表現のうち、笑いと泣きに関わるオノマトペに絞ること、コーパスとして「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)と『现代汉语语料库』(CCL）を採用すること、原語の辞書として『日本語オノマトペ辞典：擬音語・擬態語4500』と『现代汉语词典』『现代汉语规范词典』、対訳辞典として『日中辞典』『日漢大辞典』『中日辞典』『中日大辞典』を用いることが示されたのち、「笑う」や「泣く」などの述語をキーとして、少し広めにオノマトペ表現の採取を行うことなど、調査の方法が示される。

「第３章　「笑い」に関するオノマトペ」では、日中両言語における「笑い」に関するオノマトペの使用実態について考察が行なわれる。BCCWJ と CCL の用例調査を行い、日本語の「笑い」に関するオノマトペは、語数は擬音語の方が多いが、使用率は擬態語が高いのに対し、中国語では、語数は擬音語と擬態語で差がないが、使用率は擬音語の方が高いことなどが示される。

「第４章　「泣き」に関するオノマトペ」では、同様に「泣き」に関するオノマトペの使用実態について

検討がなされ、「泣き」に関するオノマトペの使用実態は、「笑い」と同様に日本語では擬態語が多用されるが、中国語では擬音語が多用されることなどが示される。

「第5章　日中のオノマトペのシステムについて」では、日中語それぞれの「笑い」「泣き」に関わるオノマトペについて、定義、音韻、形態、文法などの観点から検討が行われ、日中両言語でオノマトペのシステムの違いについての考察が行われる。音韻的側面からは、日本語オノマトペにおいては、清音と濁音の対立や母音の対立が意味の対立と結びつきやすいのに対し、中国語オノマトペにおいては、無気と有気の対立は意味的な対立には結びついていないこと、母音の対立は意味の対立と一部結びついているが、不明確であること等が指摘される。形態的側面からは、日中両言語ともオノマトペに反復形が頻用されるが、日本語は反復形と非反復形が対立することが多く、音韻的な異形態にも反復形と非反復形があり、バリエーションが多いことから、日本語の反復形オノマトペは非反復形と対をなす、生産的なものであると位置づけている。これに対し、中国語の反復形オノマトペは、非反復形とペアになるものが限定的で、生産的なものとは見なしにくく、語彙的なものであると結論づけている。

「第6章　オノマトペに関する日中翻訳」では、主として辞書類の調査から、日中対訳に生じている問題点が明らかにされる。日中語のオノマトペの対訳は、「ハハハ」／「哈哈」のように語と語で対応させられるものもあるが、対訳辞書で「嘻嘻」「眯眯」「盈盈」「吟吟」「呵呵」「咧咧」のいずれもに「にこにこ」が当てられるなど、一対多対応が多いこと、「嘿嘿」には「へへへ」が当てられるが、実際の用法では「嘿嘿」は子供の無邪気な笑い声にも用い、「へへへ」で置き換えることが出来ない場合があることなど、語と語の対応では問題があることが具体的に示される。日本語のオノマトペが情景だけでなく、対象や話者のイメージ喚起をなす叙情的傾向が高いのに対し、中国語オノマトペはイメージ喚起が曖昧であることが示される。このため、従来のような、単に語と語を意味的に近いもので結びつけるといった研究では、感情を表すオノマトペは適切に分析できないと結論づけている。

終章では、第3章から第6章までの議論を総括するとともに、本研究の結論やその意義、今後の課題が述べられる。

審　査　の　要　旨

1　批評

本論文には、三つの特徴がある。一つ目は、感情表現に関わるオノマトペを丁寧に集めて比較し、語と語の置き換えによる対照の不備を明確に示した点、二つ目は、対象となる日中両言語のオノマトペの対照に留まらず、両言語のオノマトペ・システムの違いを踏まえて論じた点、三つ目は、日中両言語のオノマトペの対訳において、どのようなところに不具合が出ているのかを具体的に示した点である。

まず、第一の点について。本論文は、あえて感情表現に絞ることで、表出の観点から日中両言語のオノマトペ的表現について分析・対照することに成功したと言える。従来の日中両言語のオノマトペの対照研究は、日本語の小説やマンガに出現するオノマトペが中国語でどのようなオノマトペに置き換えられているか（または省略されているか）といった観点から対照されることが多く、対照研究と言っても、日本語から中国語への一方向の研究、かつ語と語の置き換えに関する研究に過ぎなかった。本論文は、感情表現に絞り、かつ次項に述べるように述語からオノマトペ的表現を探ることによって、笑い・泣きの状況でどのようなオノマトペがどのように使われるのか、日中両言語のオノマトペの使用実態を分析し、語数や使用頻度、擬音語と擬態語の使用傾向などを明らかにしている。

第二の点については、本論文は、個別の調査をシステマティックな観点から再検討し、それぞれ位置づけ

を確認することで、範囲や数量的な課題を克服しているということである。日本語の「擬音語・擬態語」、中国語の「象声詞」は、ともにオノマトペの訳語として用いられるが、前者は意味的な語彙カテゴリーであるのに対し、後者は品詞として形容詞や副詞と対立する存在である。また、前者は、擬音語と擬態語を含むが、後者は基本的に擬音語のみのカテゴリーである。従来の対照研究はこうした差違を十分検討することなく、第一の点に触れたように、語と語の置き換えで済ませていた感がある。先にも触れたように、本論文は、「笑う（笑)」「泣く（哭)」に関わる述語を軸に、特に中国語について広くオノマトペ的表現を収集し、その性質を分析し、対照に及んだ。この過程で、日本語と中国語における擬音的表現と擬態的表現の使用実態と両言語の差が明らかにされ、また、日本語の擬音語に「げらげら」「しくしく」のように直接引用できない擬態語的性質の強いもの（感情表現以外には「がやがや」「ざわざわ」など）があることなども明らかにされた。本論文により、今後の日中両言語のオノマトペ対照研究の新たな出発点が定められたと言って良い。

第三の点は、従来の日中両言語のオノマトペの対照研究や対訳辞書は、日本語の研究の影響を大きく受けて、日本語のオノマトペの観点から記述されることが多く、そのための不適切な記述が少なくないことを具体的に指摘したという点である。先に触れた「嘿嘿」に「へへへ」を当てるようなものも、「ハハハ／へへへ」という日本語の母音の対立と意味の対立の結びつきを、無批判に中国語に当てはめて、結果的に「嘿嘿」の使用範囲を狭める対訳をしたものと考えられる。こうした不適当な対訳が具体的に示されたことは、日中語翻訳や日本語教育、中国語教育に寄与するところが大きいと考えられる。

本論文は、感情表現に関わるもの、特に笑いと泣きに関わるオノマトペしか扱っていない。日中両言語とも、笑い・泣き以外の感情表現では、使用されるオノマトペの種類や用例数が少なく、十分な対照に耐えられず、対象を絞ったことは科学的な妥当性を担保する上での必要な措置であると考えられる。この範囲でも日本語オノマトペの叙情性と中国語オノマトペの叙景性という対立を描き出すことに成功しており、先の点により、本論文の価値が損なわれることはない。

2　最終試験

令和 5 年 1 月 19 日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3　結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。